

<特別講演>

第12回 TIMS 国際会議および第5回地域学会
ヨーロッパ大会に出席して

西野吉次*

1 昨年11月頃でしたか、アメリカのシンシナチ大学のジェーガー教授という方から、私のほうに個人的な私信で、1965年の9月にウィーンでやる第12回のTIMSの会議で特にに各国における経営科学の様子とか、あるいはそれに関連する数学の教育関係についてのセッションを設けたいと思っているから、それについてひとつ日本の事情を知らせてくれないかというような旨の手紙をいただきまして、それは大へん結構なことだと思いましたし、すでに、アメリカにおいては日本のOR学会からおいでになって、それなりに報告をされたことがありましたけれども、ヨーロッパではまだそういうこともなかったと思ったものですから、行く行かないは別として準備だけはしておこうと考えておりました。なにぶんヨーロッパまでですと、あるいはアメリカも同じですが、旅費が大へんですので、ほとんどこのことのためにだけ、貴重なお金をしぼり出すのももったいないと感じておったので、はじめは何かの形で、あるいはついでの方をお願いすることを考えておりました。実はORあるいは経営科学の事情、それに関連する数学教育の事情などについて報告すると致しましてもある程度基本的な調査もやらねばならないし、それはまた有意義なことでもあるからぜひやろうかと思って出居君に相談しまして、計画を進めておりました。文部省あたりへ行けば何かまとまったものがあるかと思って出向いてみましたが、どうも要を得るようなインフォメーションは出てまいりませんでした。そのうちにたまたま数理科学という雑誌に、文部省統数研の内田さんという方が数学教育ということについて、調査された報告がございまして、これは大へんありがたいと思って早速内田さんのところにご連絡いたしました。そのときにすでに報告されたもののほかに、なお集計しておられる最中のものもありました。そのほか、同研究所の青山さんによって、日本の企業におけるOR活動の実態調査という最近のいろいろな調査をまとめられたものが出されていることを知りまして、これは大へんありがたい、ぜひこれらの中から適切に資料を引っぱり出すことのお許しをお願いして、報告させていただきたいとお申しましたところ、幸い快くお許しを得ました。さらに日科技連のオペレーションズリサーチ誌に、国鉄あるいは電々公社その他のOR関係の活動状況が報告されておるのを見付けまして、国鉄、電々公社の村中さんとか今川さん、松島さん、などをお願いしまして、ひとつ国鉄なり電々公社なりの活動をごく簡単に報告させていただくことをお許し願うと、いずれも快くお許

* 早稲田大学生産研究所 1966年5月12日 第19回研究発表会講演 「経営科学」第9巻第4号

しを得ましたので、ようやく報告書というものが曲りなりにもまとめられる見通しがつきました。

その折に、実はびっくりしましたんですが、統数研のほうでなされた教育関係の調査にしても、われわれ半年もあればなんとかわかるだろうというぐらいに思っておりましたが、とてもじゃない、そんなに簡単にいくものじゃないということを知りまして、これがなかったらおそらくまとめも何もできなかったのではないかと考えておるわけです。

報告のほうは一応それでメドがついたものの、あと会議に行く行かないの問題については、まだはっきり結論が出ていませんでした。そのうちに、旅行社から非常に安く行く方法があるという話を聞いて、それはどういう方法かと聞きましたら、横浜からソビエトの船だが、それに乗って、ソビエト回りで行くほうがいい。そしてモスクワあたりから飛行機で乗り継いでヨーロッパの各国に入ることにすれば、おそらく日本から直接飛行機で行くよりも、その半額位で行けるといふ情報を入手して、それならなんとか可能性があるだろうというので、去年の5月か6月によく行くことに決定できたような次第であります。

出かけるについては、生産研究所はじめ、あるいはTIMSの日本支部とか、その他関係会社のご後援を得たようなわけでして、この機会を通じて感謝の意を申し述べる次第であります。

そこで安いということについて、みなさん方のご参考にもなるかと思しますので申しますと、横浜からモスクワまで片道で、途中の食事もみな含めて8万5000円ぐらいです。それは横浜から一応ナホトカにて、ナホトカからハバロフスクまで汽車に乗って、ハバロフスクでモスクワ行きの飛行機に乗ります。時間は船が約55時間、船に乗って移動している時間は48,9時間ですが、出船するときとか着いたときにいろんな船内での手続きなどがございますので55時間ぐらい。それからナホトカからハバロフスクまでは夜行列車で約18時間ぐらいでして、ハバロフスクからモスクワまでは飛行機で約9時間ぐらいかかります。モスクワからは大半の国へ飛行機で行ってもおそらく3万円ぐらいだと思います。

私は出発間際になって、地域学会というのが、これは第5回ヨーロッパ大会でしたが、ポーランドのワルソーから約200キロかそこら南のクラコフという市で開かれることを知りまして、ちょうど時間繰りがよかったので、そこへも出席しようと思って出かけました。きょうは地域学会というのはあまり関係がなさそうですが、内容的にはやはりある程度共通したものもあると思われるので、概略ですが、2つの学会に出席して、という形で話をさせていただきたいと思っております。

旅行のほうは、ほんの通りがかりの雑な観察で、ほとんど話にならないようなものですが、珍しくもソビエトを通過して、数日間の経験ですが、私の感じたままを申し上げてみたいと思います。ちょうど8月21日の出帆で、船はバイカル号といって5000トンぐらいのもので、そう大きな船ではございませんが、なかなか小じんまりと立派にまとまった船でした。おそらく乗ってごらんになれば、小さいながら飛行機で味気なく行ってしまうよりもたじかにおもしろい感じを受け

られると思います。

船の中では日本円がそのまま使えます。船を降りる頃になってようやく持ち金を全部申告しなければならぬのですが、これは格別持って入る額を制限するわけではありませんで、むしろ持ち出すときにルーブルを自国、つまりソビエト以外に持ち出すことを嫌っておるためのようです。申告の場合には決してうそを言っただけではいかぬということを聞いていましたので、そっくりそのまま、船の中で使ったあとの日本円もドルもみな申告いたしました。

一般的に云って当初考えていたほど窮屈な感じはございません。ソビエト人というのは一般に日本人と比較にならないくらい、悪く言えば少し抜けたように感じられる位、大まかさがあるように思われました。船の中でも、シベリアを走る列車の中でも、たいてい日本語のわかる人が何人かは必ずいるようでして、その点では外国に旅したというほどの格別な感じがわいてきませんでした。ナホトカからシベリアを通過しての感想、これはほとんど何もございません。要は広漠たる原野をただ突っ走っていたというだけの感じにして、日本のように車窓の眺めを楽しむというよりは、むしろ退屈したということしか覚えていません。これはしかし夜行列車でしたのでそれ程耐えられないものでもなく、朝目がさめて数時間後にハバロフスクに着いておりました。ハバロフスクではしばらく飛行機の出発までの時間もありましたので、飛行場建物内をブラブラしましたが、そこから TU114 というターボプロップの大型機に乗って約9時間ばかりとびました。そしてモスクワにはちょうど午後6時頃に着きました。ここで思ったのですが、いろんな事務がまことに腹立たしいくらいゆっくり運ばれることです。というのは、飛行機が着いてから各人の手荷物が手渡されるまで、降りてから約1時間半かかるといって、その間どうなっているかというアナウンス1つございませんで、文句の持っていきようもありません。しかも陽は暮れるし、おなか減るし全くいららしました。またそれまでどこのホテルに泊められるのか判りませんでした。飛行場でも手荷物待合せの間にやっと割り当てられました。ソビエトではインツーリストといって、すべて国営の旅行社になっている関係で、どのホテルへ泊まりたいというセレクションは一切できません。日本の旅行社を通じてそのインツーリストと交渉をやってもらおうと、1日約1万円(35ドル)で食券までくれるようになっていきます。夏場以外のシーズンオフになると10ドルぐらい下げようですが、8月下旬ではまだシーズン中でしたので約1万円の金を取られました。もちろんその中にはガイド料とか食事代、ホテル代とか、すべてをひっくり返すものですが、ホテルの選択もできず決して安いものではないようです。

そういうわけで、自由主義国と違って、おれはここに泊まりたいと言っても、そういう自由はきかないという不便はあります。そして飛行場に到着してから、おまえはこのホテルだというようなわけで、いわば一種の荷物みtainな取扱いを受ける面もありますが、これを覚悟されて行きますと旅費全体としては非常に安く行けるという特長があるわけです。

モスクワでは一泊いたしまして、市内の見物をやりました。表道路にはどうしてこう多いのかをいぶかったぐらい人が多く歩いておられて、どうやら労働条件というのが、非常にゆるやか

にできているらしく有給休暇がかなりあるためのようです。その関係で普通のウィークデイでも人が多いということでした。一般には彼らの顔付に鈍重そのもののような空気を感じます。以前にソビエト人という民族を北洋の熊だと言った人のことを思い出したのですが、鈍重さの面影に、格別相手から何かけしかけられない限り攻撃的な姿勢をとるという風なことは何も感じられないけれども、ただ逆に、これを怒らせたなら大へんだという感じを非常に強く致しました。これは単に顔とか、その他二、三の動きからみてそう思っただけですが、他面スプートニクとかルナーとか、いろんな宇宙科学において彼らの示している偉大な科学技術力というものを考えますと、まことに大したものですし、それからモスクワ市街を見物しても、やることのスケールが非常に大きい。たまたまモスクワ大学付近での都市計画の面に接しますと、まずこういう社会体制の国、すなわち社会主義国家として、一方的に、ほとんど命令的にやるという国だからこそできるのかなとつくづく感心しました。スケールの大きい都市計画でモスクワの市もだんだん見違えるようになってくるのではないかと思います。

それから地下鉄も一度乗ってみましたが、これは本に書いてあるように、駅の中は大理石で張りめぐらしてありまして、大へんきれいなものですが、ただいかんせん乗り口から乗り場までかなり時間がかかって、ちょっと日本なんかの2倍から3倍ぐらい歩かなければならないという事情でした。

モスクワからレニングラードへまいり、ここにも一泊して、町見物をして、それからワルソーへ、むしろ鉄道の方がいいだろうと思って汽車で行きました。ヨーロッパ側ですからシベリアとは違って何か工場なりその他いろんな変わったものが、見られるであろうと思って期待しておったのですが、これも非常に規模が雄大というか、行けども行けども人家は目に入らないようなところばかりの状態で、これがいわゆるロシア的風景なのかとつくづく感じるばかりでした。私が家のないことにびっくりしているのと同じように、向うの人間は日本へ来ると、汽車に乗っていて家がなくならないのにびっくりするそうです。それは広さの関係もあるでしょうが、まったく広漠としているという感じそのものです。そのうち国境で汽車の乗換えと手荷物の点検という面倒をかけられてポーランドへ入ったわけです。

ポーランドという国は、同じく社会主義の国ですけれども、顔つきも違うし、服装なんかもう少し明るい感じを持っております。ポーランドはナポレオン時代に、いわゆるラテン系の血が相当混ったといいますが、今のポーランド人にもそういう傾向が非常に強く見られます。したがって大分西欧に近くなったという感じを受けます。ワルソー市は立派に回復したものの、この国の経済状態は必ずしもよくないではないかということが先づ感じられます。たとえば町を走っているタクシーは非常にガタビシの車が多いようですし、ほとんど単一色で形もいろいろあるというものではございません。聞いてみますと、大戦後ソビエトがドイツのпатентを持って行ってポーランドに売りつけた。それを作っているんだというようなことを聞きましたが、大体この国はそう工業らしい工業もないようですし、そういう意味からいっても、現在の経済状態というの

は決してよくないように思えます。東大経済学部の今野先生のお話によると、バルチック海側のほうにドイツからの賠償による製鉄所と、他に2、3のちょっとした工業があるだけで、大半が農業国であるということです。そういう関係のためかワルソーから南のクラコーへ行った際にびっくりしたのは、ドルをヤミ買いするのが多くて、一時日本でもそういう状態だったのかもしれませんが、レストランのボーイだとか、それから道を歩いていてもヤミ屋らしいのが、おまえドル持っていないかとやってくるわけです。この国の貨幣単位はズロッチーというので、日本円に対応させますと公定では約15円見当のものですが、町で向うが言い寄ってくる値段は約1/3から1/2までの間です。私たちの場合は、実はすでに日本の旅行社を通じて一切やってあったものですから、多少のプレミアムは付いていましたが、そういう事情については夢にも思いませんでしたしこのような歩のよい交換の恩恵には浴し得ませんでした。ですからうまくやりたい人は、予めホテル代などを、インツーリストを通じて払い込まずに向うに行かれて、向うでドルでズロッチー紙幣を買うようにすると、非常に安いホテル、宿泊料ということになるということもいえるわけです。がこんなことはうまく行くかどうかは保障の限りではありません。

以上で概略ですが、各国の様子を終わることにしまして、地域学会の概況にうつります。配布しましたパンフレットにいくつか情報を概略書いておきました*。あまりこれに深くタッチしないつもりですが、この学会では参加者が割合多かったようです。8月30日から9月3日まで5日間行なわれたのですが、講演の数はTIMSほど盛大なものではございませんで、約15ぐらしかありませんでしたが、それを5日間でやるので、非常にのんびりしております。午前中にちょっとやって午後はやらないとか、あるいは午後からやるとか、間にちょっと町の見物を入れるとか、またそのほかに会議中もディスカッションの時間が非常にじゅうぶんとられております。一般の学会のようにたくさん論文があればそうはいかないんでしょうけれども、この学会に関する限り、昔からそういう方式で進んでおるようです。1つの講演が終わりますと、あらかじめその論文を読んでおいてもらってあるディスカタントという人たちが登壇して少し詳しい質問をやる。あるいはまとめて近いむしろ解説的な関連質問をされる人もおります。そういうわけで、その場で論文の討議ということが非常によく行なわれる。質問者がたくさんあるとすると、講演者はそれを一応自分の席に戻って聞いておいて、質問が終った頃に全部まとめて返事をするためまた登壇するという形でやっております。参加者が229名ほどありましたが、その中には日本からも、私のようにちょっと通りがかりに立ち寄らせてもらった者も含めて7名、そのほかにオランダの社会科学研究所へ留学するという3名の日本の若い人が、これはオランダからの派遣員という形で参加しましてかなり盛大な参加となったわけです。

ここではアメリカのアイサードという教授が主に会議の司会をするという格好でやりましたが、大体この地域学会というのもアメリカ中心に発展してきたためですか、ソビエトからはたっ

* 当日配布したパンフレットは早大生産研報告 No. 14 に掲載したものの別刷である。

た一人しか参加者がありませんでした。

5日間の会議の内容の概略はパンフレットに書いておきました。TIMSでの報告にもありましたが、1つの共通した問題点としては、ベネフィットコスト・アナリシスというような問題が論じられました。きのうもこの学会で対比較法の応用というお話がありましたが、要は公共部門における経済活動には、いわゆる私企業部門におけるようなマーケット・プライスあるいはコストという尺度でいろんな価値を測定できない立場の問題がありますが、そういう問題にかなり意を向けている様子が強く出ておったようでもあります。

そのほか、あるいはコメコンの協力を説く人あり、それからポーランドで開かれた関係で、ワルソー市の建設計画とか、また日本からも阪大の市村真一教授ならびに大石東大教授が日本の実状を話されましたし、今野教授によって日本の地域学研究に関する総論的なお話がなされました。

地域学会を終えて9月8日から10日まで3日間、今度はウィーンでTIMSの会合が開かれるので、ちょうど前日の7日にウィーンに着いたわけです。ウィーン大学のニューインスティテュートが会場でありまして、ここで開かれたセッションを中心に、簡単にお話したいと思います。私の出かける前に実はきのうお話された矢矧さんとか、興業銀行の足立さん、その他の方で、どうやら数名の方が行かれるようになりそうだというので、TIMS日本支部としても、それぞれ所属機関に派遣方をお願いしまして、かなり脈はあったのですが、その場になって残念ながらだめになってしまい、結局この会合には私だけが出れたことになったのですが、たまたまOECDからの仕事を終わられて帰られる、われわれのところの河辺教授、それから三菱原子力の菅波さんがちょうどその会合にアメリカから立ち寄られるということで、相前後しましたけれども、3名が参加いたしました。

この会議に対するレジストレーションを行ないまして思ったことですが、中心的に世話をする人がいなかったためですか、準備という点で余り感心しない点がありました。レジストレーションフィーだけは非会員で9,000円、会員は6,000円というかなり高い額ですが、くれたのは会議プログラムと、それからウィーンの市街地図とが紙ファイルに入れてあるものだけでずいぶん高過ぎるとびっくりしたような次第です。

あとセッションに出ておって、ようやくいくつかのペーパーのコピーをもらって見たものの、あいにく会期中は毎日のごとく三本立てでやるほどにたくさん講演数があったので、一人ではとても聞けませんし、また他のお二人もたまたま立ち寄られたので、格別こうしよう、ああしようと申し合わせをするわけにもいきませんでしたので、私のほうでできるだけ聞いておこうとしたわけです。

第1日目午前はデジジョン・セオリーとセオリー・アンド・エバリュエーションというのとそれからシステムス・アンド・プランニングのセッションが3つの部屋に分かれて行なわれました。私は3番目のシステム・アンド・プランニングというのに出まして、それについての概略を

配布のパンフレットに書いておきました。さっきも触れたように、公共部門に於けるパリュウと
いうことをいかにアナライズするかについての論文もありまして、この頃叫ばれているコスト・
エフェクティブネス・アナリシスということに関する1つの考え方を述べております。そういう
論文をはじめといたしまして、ここでは4つ5つ聞きましたが、それらの内容の概略はマネージ
メント・サイエンス誌のポリウム 11・No. 8 をごらんいただくと、のっかっているはずで
す。詳細は時間の関係で省略させていただきます。

午後は主に各国の経営科学、あるいはそれに関連の数学ということについての分科会すなわ
ち、マネージメントサイエンス・アンド・ザ・マセマーティックス・カリキュラ、そのほかにサ
イコロジー・オブ・マネージメント・ディシジョン、それからトピックス・イン・チャンス・コ
ンストレンド・プログラミング、などのセッションがございました。ここでは第1のセッション
に出たわけですが、まず第一に私の番がまいりまして、これについてはすでに私どもの研究所で
出しているIRP誌の13号に書いておきましたが、先ほど申しましたように統数研の報告を参考
にさせてもらったり、その他いろいろ調べたところをかいつまんで申し述べ、また教育白書など
も眺めましてまとめた教育事情を知らせたわけでありまして、私の後の講演には、現代の動きとし
てとらえて、マネージメントサイエンスなどに使う数学をわれわれの日常生活に直結する数学と
いう目で見まして、これを新しい数学として考え、こういう方面の趨勢を述べた論述が2番目、
3番目に出てまいりました。たまたま3番目の論文でしたか、“Innumerate Nation”という、
ちょっと私も初めはどういう意味かわからなかったのですが、そういうテーマでイギリスのアル
バート・バタースビーという先生が話されまして、イギリスでの事情が割合日本の実情と似かよ
ったような感じのことを申しておりました。イニューメリットというのは、むずかしい形で言っ
てしまったのでは、しろうとには、あるいは科学者やエンジニアの話しがわからなくなるんだ
が、そういうように科学者や数学者の話していることを理解しはじめることさえなし得ないとい
う意味だそうなんです。要するに論ずるところは、今後数学が、自然現象のみならず社会現象におい
ても、事柄を数量化して調べるために益々必要になってくるのに反して、今までのイギリスの教
育、特に数学教育をみると昔ながらの姿であって、それを改善するということの努力も少なく、
あるいはまた純粋学術的態度が強過ぎる。snobbery とかいう言葉を使っていましたが、これは
応用数学などというものは、数学の邪道だというような考え方、いわゆる現実に関係するという
ことを、むしろ毛嫌いするというようなそういった気風がやはりイギリスでも大分あるんじゃない
か。そういうことに対する反省も必要であるとか、あるいはもっと数学者を補給してやらない
と、だんだん世界に遅れるとか、そういう意味でイギリスにおける事情を、半分は嘆き、半分は
今後の姿勢を求めねばならぬという論議でありました。

その次の話はアメリカ、ミシガン大学のスロールという先生の話でございました。これは経営
科学者の数学教育に関するアメリカCUPMの勧告という題でありました。このCUPMという
のは、アメリカの大学の学部の数学教育についての委員会というものであります。数学協会の中

にこういう学部の数学教育委員会というものがあるそうでありまして、社会科学とか、あるいは生物関係、つまりバイオロジカルな関係の学生とか、あるいはマネージメントの学生に対して、学部の間にもどのような数学をコースとして置いてやらねばならぬかということ、この委員会が中心になって——これはどこかの研究資金を仰ぎながらの活動らしいのですが——すでに推せん案というものをまとめた由で、その概要の話でありました。これにはパンフレットをくれまして、事細かに書いてありました。その概略をお渡ししたパンフレットに書いてあります。そんなわけでアメリカあたりでは、ずいぶん先を見越しながら、学部の数学教育というものをどうすればいいかということ、かなり真剣に取り組んでいる姿を見たわけでありました。

あまり時間もありませんので、2日目の午後のザ・トレーニング・オブ・マネージメント・サイエンティストというセッションの模様を少しお話しします。これはやはりジェーガーという先生がチェアマンをやったセッションでございまして、これは論文発表でなくパネルディスカッションでありました。経営科学者のトレーニングということについてでありまして、主にはどういう科目をどういう形で教えるべきかということについてのパネルディスカッションであったのです。その模様もちょっとパンフレットに書いておきましたけれども、われわれのよく知るダンツィック教授とか、あるいはクーパー教授とか、そのほかカウフマン、ツァイルという、オランダの経済学の先生とか、いろんな先生がパネルメンバーになって、最初にダンツィック教授から教授科目として、マセマティカル・プログラミングとか、レライアビリティ・セオリーとか、インベントリー・セオリーなどのようなものを一応黒板に書きました。ところで、それに対してカウフマンという人は、そう事細かに各項目別にとらわれる必要はない。もう少し大まかな形で、あるいはリニア・アルジェブラ、ニューメリカルアナリシス、プロバビリティ、スタティスティックス、グラフ・セオリーあたりでどうだとかの意見が出て、それに対してクーパー教授が、（この印刷物ではページの下から4行目にクープマンと書いてあるのは、クーパーの間違いです）革袋に盛るのに、何も項目にとらわれることなく、その概念を強調したほうがいいんだということで、右上にあるような図表を書き上げました。これに応じて、おもしろい、ひょうきんなバソニーという人が大いに同調する演説をやったりしました。要は行動の科学である、だからそれに対してアクション、それからフェノメノンというものを調べる。またモデル化する。そこへ創造性を発揮させる。またエナミュレーションをどうするか、ナンバリング、オブチマイゼーションの考察そこへテクノロジーの利用という工合に進める、このような考え方のもとにやったらというようなわけでありました。格別、これが最後の結果だとか何とかいう意味ではありませんで、そういった真剣な討議を通じて新しい数学をいかにして教えるかということ、しかもそれを大学教育のみならず、高校教育における関連性においても大いに論議しておったように思います。これを聞いて実は私もうらやましいとさえ思ったわけですし、日本でいいますと、おれは文科だから、もう全然数学はにが手だとか、最近はずいぶん違ってきたとは思いますが、そういう空気が多分にあります。ただしかしそういう空気に対応して適切な教育が本当にうまく行なわれ

ようとしているのか、また行なわれているのかという点をいぶかりながら、私自身もあまりよく知りませんが、こういう教育的関心を他山の石にしたいとさえ思っただけです。

あとカレッジにも出席はしましたが、多少疲れてしまって、あまりよく理解できなかった点もありますし、先ほど申しましたように、じゅうぶんな準備がなかったので、参加した者としてはいくらか不満な感じを持って帰ったわけでありませう。

どうやらこの開催国にはマネジメントサイエンス関係の専攻をやっている人が居なかったのじゃないかと思うのですが、したがってスイスの先生とか、アメリカの、ちょうどその当時ドイツのどこかにビジティング・プロフェッサーとして行っておりましたジェーガーさんが中心でまとめたものらしく、論文の数は各セッションでおおよそ6つ平均でありまして、そのセッションの数が大体18ぐらいあって、それだけありますと相当の数になったわけでありませうが、出席者は割合少く大体110名ぐらいでした。講演者の予定数は多かったのですが、欠席者が8名おります。そんなことを考えますと、いくらか準備が不足であったり、あるいはPRが不足であったりしたような点があったんじゃないかと考えております。

ただオーストリーという国は非常にきれいなところでありまして、私も学会が終ってから少しチロルの谷あたりを旅行させてもらいましたが、大へん気持ちのいいところであります。ウィーン自身は観光地ですので、ホテルなんかも比較してみても安くございませんが、少し田舎に行くと非常に安いところがあります。ウィーンでは最上級は別にして、普通、あるいは上の下ぐらいのところまでですと10ドルぐらいで泊まれますが、チロルあたりでは3ドルぐらいでじゅうぶん楽しい旅館に泊ることができます。もっと田舎で2ドルぐらいで泊れるところもあります。もちろんそれは旅籠という程度で、おふろなんかもちろんありませんが、そういうところもあります。一般に物価はそう日本と違った感じもいたしません。ここは中立国、むしろ西欧側とみたほうがいいんでしょうけれども、それなりに物資も豊富で、だいぶ今迄通ってきた国とは空気なんかも違うように感じました。以上で私の旅行談を終わりにしたいと思います。もしヨーロッパへご旅行になる方がおられるとすれば、時間を少し犠牲にされて、私の通ったコース、つまりソビエト回りをやられますとお金もずいぶん楽ですし、行って見て日本で聞いたほどに窮屈さは格別ありません。ソビエトにしてもポーランドにしても、共産圏のどこの国でも外貨をほしがっておるようですので、サービスの的にはクーポン券でプレミアムを多少つけてくれたり、特典もあるようです。ただシーズン中はちょっと高いようです。しかし天空をパッと飛ぶよりむしろそのほうがいいというお考えの方はご利用になったらいいかかと思えます。ただ近く日ソ航空協定などが設けられると、あるいはまた値上げになってしまうかもしれませんので、これはなんとも言えませんが、現在のところはまだそういうことがないようです。

大へんまとまりのないお話を申しました。概略ですが、報告としての内容はプリントに書いてありますので、もしそれ以上にお知りになりたい方がおられましたら、私のほうへご連絡下されば、あるいはお知らせできるかと思えます。